

第9回国際交流基金の運営に関する諮問委員会 議事概要記録

1. 日時：平成31年1月28日（月）10時00分～12時00分
2. 場所：国際交流基金本部ホールさくら
3. 出席者：
〔委員〕五百旗頭座長、迫田委員、建島委員、千野委員、永井委員、宮本委員、渡辺委員
（五十音順）
〔基金〕安藤理事長、櫻井理事、柄理事、福田理事、沼野監事、鴨志田監事、八原上級審議役、松川上級審議役、小島企画部長、古屋アジアセンター部長
〔外務省〕清水広報文化外交戦略課首席事務官、垂井文化交流・海外広報課首席事務官、ほか、オブザーバーとして外務省ならびに基金より出席
4. 議題：
「文化のWAプロジェクト」の中間総括・評価と、2021年以降について
5. 議事概要：
アジアセンター事業の2本柱である「日本語パートナーズ事業」と「双方向の芸術文化交流事業」について、これまでの総括とさらなる展開に向けた課題等について意見交換が行われた。主な論点は以下のとおり。

(1) 日本語パートナーズ（NP）事業について

- ・日本語パートナーズ事業は、派遣先国の学生の日本語学習に対する高い動機付けにつながり、日本への興味や関心の向上にも貢献している。また、派遣先校の現地日本語教員からは、自身の日本語運用能力が上がったことや生徒の日本語や日本文化に対する学習意欲が湧いたことなどに対する好意的な評価が寄せられ、派遣されたNP自身にとっては、派遣先国の言語や文化を学ぶ異文化体験を通じて自分自身の成長につながっている。
- ・派遣終了後のNPが日本国内で活動する場合、基金はどのように支援すべきか。帰国したNPが、来日外国人に対する日本語教育や地域社会包摂など、その経験や能力を発揮する場を紹介したり、作り出したりする必要があるのではないかと。
- ・帰国後のNPの日本での活躍にも期待している。多文化共生が進んでいく日本で、NP経験者が今後活躍する場が出てくるだろう。NP経験者は日本にとって大きな財産になる。
- ・大掛かりなイベントでなくとも、派遣先の言語や文化を、日本国内の地域に還元するなど、自分がNPとして派遣先で学んだことを各地域や大学などで披露する場があることが望ましい。
- ・アジアセンターは2020年をもって終了すると聞いているが、ぜひ、継続していくべきだ。各国には日本企業の駐在員が派遣されている。その家族をNP事業で活用することはできないか。駐在員のご家族であれば2年以上は現地に滞在しているだろう。そういった方々の協力を得れば、NPの数を増やすこともできるのではないかと。
- ・現代世界では、外国人が日本で嫌な思いをすると、SNSなどで家族や親戚、友人を通じてすぐに母国に情報が伝わる。むしろ、そういう口コミが強い影響力を持つ。日本国内

にいる外国人コミュニティをもパブリックディプロマシーの対象者として考える必要が高まっている。

- ・派遣前に4週間の研修を受けて6～10か月派遣されるとのことだが、少し派遣期間が短いのではないか。NP 当人と受入機関の双方が望む場合には2年程度にまで延長できないだろうか。

(2) 双方向の芸術文化交流事業について

- ・国際協働作業の過程では、文化の違いで驚くような事態、大変な事態に直面することがあるが、それもまた文化交流の醍醐味であり、新たな発見。
- ・芸術的創造の過程で、宗教や文化、環境の異なる人々と議論を深めた時間や理解が芸術を通じた文化交流の成果。共に時間を過ごす、という経験が重要。
- ・文学や伝統芸能、演劇など言語を伴う形式は、文化芸術交流事業の中でも日本語学習の誘因になりうるのではないか。言語的な障壁・制約が日本文化の紹介にプラスに働く場合もありうる。
- ・非常に発信力のある個人を通じて、海外に日本文化をアピールすることは重要。たとえば、スポーツでいえば大坂なおみ選手は英語ネイティブでもあり、彼女の存在を通じた文化交流面での影響は大きい。同じようなことは美術などの分野にもあり、たとえば草間彌生の展覧会は影響が強い。それだけの人材が様々なジャンルにいると思う。
- ・今後のアジアセンターも、日本国内でイベントや公演、シンポジウムなどを行うことで、「日本を介在させた、アジア地域の国際文化交流」を図ることが望ましい。
- ・諸外国では優れた舞台芸術作品を、再演を繰り返しながら、完成させていくことが多い。国際共同制作で創り上げた作品についても再演を繰り返し、作品をよりよくしていく中で、交流をさらに深めていくことが肝要。
- ・文化交流の輪を広げていくためにも、国際交流基金の担当者には、現地のアーティストや関係者を紹介したり、助成の可能性を検討したり、スポンサーを提案したりと、日本側のアーティストと作品と一緒に作り上げていく役割を務めてほしい。国際交流基金にとってもアーティストの相談に乗る役割を果たすことに可能性があるのではないか。

(以上)